

約、共同の場として機能し続けており、鈴木栄太郎が「自然村」といい、有賀喜左衛門が「家連合」といった社会学的な村の概念は、このような近代における村の実態について概念化されたものとみることができよう。

なお、ここで有賀喜左衛門の同族団概念との関連について述べておくと、たしかに牧曾根村など庄内の村にも、本家・分家関係からなる家々の集団、つまり同族団は存在している。しかしそれは、一般に本家と血縁分家からなる数軒程度の小さな集団であり、村の基本的な構造をなすとはいえない。その集団においては、先祖祭祀や冠婚葬祭などがおこなわれており、また条件によって経済的扶助なども行われているが、それはしかし、村から見れば当該の家々のいわば「私事」であり、村人の協議、契約、共同の場として「公」的な意味をもつ村とは異質なのである。

B-3 農業パートをする人々の多様な労働観—現代農業を働き方という視点でみる—

渡部鮎美(総合研究大学院大学)

農業パートとは日々または一年以内の期間で農家に雇われて農作業をする労働形態および労働者のことである。農業パートは古くは田植えや茶摘みなどの季節労働にみられる労働形態で、現在でも全国で多くの人たちがパートとして働いている。

先行研究では農業パートの農業経営や歴史性の面から評価してきた。農業経営の上では農業パートは農業の補助的な労力として考えられてきた。歴史的には農業パートは古くからある季節労働の延長線上に位置づけられてきた。村落単位で集団をなしてやってくる早乙女などの伝統的な労働と同一視されたのである。一方で農業パートが彼らの生活のなかで、どのような意味をもっていたのかはほとんど議論がされていない。また、農業技術の変容にともなうパート労働の変化についても検討がされてこなかった。

本発表ではまず、農業パートの雇用形態とその農業技術の変遷を明らかにする。その上で、現在まで雇われてきたパートたちの労働観を論じる。事例として千葉県富浦町の農家1戸で雇われてきた農業パートを取り上げる。

千葉県富浦町はビワの一大産地である。本発表で取り上げる農家は1970年以降にビワの栽培面積を拡げ、1975年から農繁期にパートを雇ってきた。また、1980年には食用ナバナ(春先に菜の花として販売される野菜)の栽培をはじめ、1990年からパートを雇いはじめた。1970年代から80年代にかけてビワのパートとして雇われたのは富浦町やその周辺地域の青壮年の男女であった。その後、地域の産業構造の変化によって高齢者や中年の男女がビワやナバナのパートとして働くようになる。さらに2000年代後半からは富浦町と周辺地域の人々に加え、地域とは全く関係のない若者たちがパートの仕事をしている。

調査では現在のパートや農家の労働を計量・計測し、各々の技量差を検討した。また、今日までの出荷形態の変遷とパートの人材の変化を探った。調査からは農業パートの労働内容や人材が大きく変化していたことが分かった。パートに求められる技術レベルは1980年以降のビワやナバナの出荷形態の変化によって下がり、それとともにパートの賃金は相対的に低くなっていった。労働内容や人材の変化とともにパートたちの仕事の目的も多様化している。近年、パートの担い手となっている農業経験のない若者は農業を体験することを目的のひとつとして働いている。一方で

地域の人たちにとって農業パートは主たる生業活動の合間にする息抜きの仕事になっている。つまり、産業としての農業のなかには目的を異にして働く人々が混在しているのである。そして、農業パートたちは村落単位でまとまって働きに来る集団ではなく、職業も出自も異なる個々ばらばらな人材の集まりとなっている。このような現代の農業の姿は産業としての農業や村落という概念だけではなく、農業に関わる人々の働き方に注目することでより深く理解することができるだろう。

B-4 有機農業に生きる女性達の生活と思想—農村地域社会の現実の中で—

飯塚里恵子(東京農工大学大学院)

本報告の課題は有機農業の意味を問うことにある。これまでの日本における有機農業研究は多くが農業論として論じられてきた。しかし有機農業はそうした農業論で語りつくされるものではなく、生活論や生き方論、あるいは社会論といった総合的あり方のなかで展開してきた。このような現実の有機農業の意味を捉えるためには農業論としてだけでは不十分であり、その他の側面も含めて考察する必要があるだろう。ここではこれまであまり論じられることがなかった有機農業女性の生活論と生き方論としての思想に視点をあてて現地調査を行なったのでその概要を報告したい。

方法としては二地域の調査地から有機農業女性を個人単位で取りあげ、各有機農業女性に対して生活観、生活行動、ライフヒストリーについてのアンケートおよびヒアリング調査を行なった。さらに個人の生活だけでなく、それらと地域との関係についても考察した。この有機農業と地域という視点は村研においても第44回大会テーマ・セッション以来、有機農業研究の重要なテーマとして提起されている。本報告はその点で村研の有機農業研究に依拠するものである。

事例調査地は埼玉県比企郡小川町と山形県西置賜郡白鷹町の二地域である。両地域とも町の周囲を山で囲われた中山間地及び平地という類似した立地にあるが、小川町は都市近郊地であるのに対して白鷹町は都市遠隔地であるという違いがある。両地域を選定した理由は、それぞれに有機農業の蓄積をもつ地域であるということだけでなく、生活論を考える上で典型的に異なる特徴を示していると想定されたからである。その大きな違いは小川町が都市消費者の視点から有機農業の意味を浮き彫りにしているのに対して、白鷹町は農村生活者にとっての有機農業の意味を提示していることである。

調査の結果からは以下のようなことが明らかになった。新規参入者がほとんどである小川町有機農業女性が志向しつくり出しつつある生活のスタイルは都市生活から農的暮らしへの転換というベクトル上にあった。それに対して白鷹町有機農業女性の場合は在村出身者が多く、彼女達の関心事はすでにあるものとしての農村の暮らしの中で自分の生き方を模索しその線上に有機農業を位置づけようとしている。

以上のことを地域という視点から見れば、小川町有機農業女性にとって「地域」への認識が意識的にも現実的にも希薄であり、白鷹町有機農業女性は自らの生きる「地域」が確固たるものとしてあるという違いが言える。ところが両地域の有機農業の現状は小川町が地域的な広がりを見せている一方で、白鷹町は地域の中での展望がなかなか見えてきていない。有機農業女性の地域問題と地域における有機農業の広まりには一種のパラドックスが生じているのである。この矛盾をどう理解すべきかは今後の日本有機農業を考える上でひとつの課題となり得るのではないだろうか。